

なか は ば  
中 羽 場 遺 跡

2018年3月

株式会社シーテック飯田支店  
長野県飯田市教育委員会

# 例 言

1. 本報告書は、株式会社シーテック飯田支店の寄宿舍建設に先立ち実施した飯田市座光寺4473番1所在の埋蔵文化財包蔵地 中羽場遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社シーテック飯田支店からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は平成28年度に発掘調査、平成29年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 発掘調査及び整理作業には略号NH B4473-1を用いた。
5. 遺構には、文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編一』に基づき以下の略号を用いた。  
 竪穴建物：S I 建物(竪穴建物以外)：S B 溝：S D 土坑・貯蔵穴：S K 炉・カマド：S L  
 柱穴・ピット：S P 礎石・葺石・配石：S S その他：S X
6. 調査区は、世界測地系による飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図(以下、「基準メッシュ」とする)に基づき設定した。  
 基準メッシュの設置については、飯田市教育委員会 2009『切石遺跡群』に記載されている。
7. 調査位置は基準メッシュの第Ⅷ座標系 LC-75 13-05、同06に位置する。  
 中グリットが2区画に跨っているが、アルファベット2文字と数字2桁で表した小グリット番号が重複しないため、中グリットは省略して小グリットのみで記載している。
8. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 2005『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。
9. 遺構図中、点描は焼土を、線描は炭化物の分布域を表している。
10. 遺物図中、縄文土器の網掛けは繊維痕の存在を、石器の網掛けは磨滅・光沢等使用痕を表している。
11. 基準点測量は有限会社キリュウに委託した。
12. 遺構写真は発掘担当者が撮影し、遺物の写真は山下誠一が撮影した。
13. 本書は羽生俊郎・山下誠一が執筆し、下平博行が総括した。執筆分担は以下のとおりである。  
 第1章～第3章第4節 羽生 俊郎 第3章第5節～第4章 山下 誠一
14. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

# 目 次

## 本文目次

序	(2) 配石・礎石(S S)……………12
例言	008 S S・017 S S・018 S S・019 S S
目次	(3) 小穴……………12
	第2項 弥生時代の遺構……………12
	(1) 竪穴建物(S I) 001 S I……………12
第1章 経過……………1	第3項 時期不明の遺構……………14
第1節 調査に至る経過……………1	(1) 掘立柱建物(S B) 002 S B……………14
第2節 調査の経過……………1	(2) 溝(S D) 003 S D……………14
第1項 現地調査……………1	(3) 不明遺構(S X) 014 S X……………14
第2項 整理作業・報告書刊行……………1	第5節 遺物……………16
第3節 調査組織……………1	第1項 縄文時代の遺物……………16
第1項 調査……………1	(1) 土器……………16
第2項 事務局……………2	縄文時代早期・縄文時代中期
第3項 指導・協力……………2	(2) 石器……………16
第2章 遺跡の環境……………3	縄文時代早期・縄文時代中期
第1節 自然環境……………3	第2項 弥生時代の遺物……………17
第2節 歴史環境……………3	(1) 土器……………17
第3章 調査結果……………7	弥生時代後期・弥生時代前期～中期
第1節 調査区の設定……………7	(2) 石器……………17
第2節 調査の概要……………8	弥生時代後期
第3節 土層……………8	第4章 まとめ……………22
第4節 遺構……………8	
第1項 縄文時代の遺構……………8	
(1) 土坑(S K)……………8	引用・参考文献……………24
004 S K・005 S K・006 S K・007 S K・	報告書抄録……………33
009 S K・010 S K・012 S K・013 S K・	
015 S K・016 S K・022 S K	

## 挿図目次

挿図1	遺跡位置図……………5	挿図7	001 S I ……………13
挿図2	調査位置及び周辺遺跡図……………6	挿図8	002 S B、003 S D、014 S X、020 S P・ 021 S P・023 S P・024 S P ……………15
挿図3	遺構全体図……………7	挿図9	S K・S S・S I 出土土器……………18
挿図4	基本層序……………8	挿図10	S I・グリット・表土出土土器……………19
挿図5	004 S K～007 S K、009 S K～011 S K、 015 S K・016 S K……………20	挿図11	S I・S K出土石器……………20
挿図6	012 S K・013 S K・022 S K、008 S S・ 017 S S～019 S S……………11	挿図12	S K・S I・グリット・遺構外出土石器 ……………21

## 写真図版目次

図版1	調査区全景……………25	図版6	004 S K出土土器 013 S K出土土器 ……………30
図版2	004 S K 007 S K 005 S K 006 S K 009 S K ……………26	図版7	005 S K出土土器 001 S I出土土器 007 S K出土石器 ……………31
図版3	010 S K 011 S K 012 S K 013 S K 022 S K 017・018・019 S S……………27	図版8	013 S K出土石器 遺構・遺構外出土 打製石鏃 001 S I出土打製石匙 ……32
図版4	001 S I 炉 ……………28		
図版5	001 S I入口施設 001 S I掘方断面 002 S B 003 S D 重機作業 作業風景 調査箇所 の現況……………29		

# 第1章 経過

## 第1節 調査に至る経過

平成27年4月10日、株式会社シーテック飯田支店より飯田市座光寺4473-1における社員寮建設に伴う、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。当該地は埋蔵文化財包蔵地の中羽場遺跡の範囲内であり、発掘調査の要否及び費用積算のための確認調査を実施することとなった。平成27年9月2日にこの調査を行った結果遺構等が確認されたため、事業実施の場合は改めて記録保存のための発掘調査が必要となった。

発掘調査については平成28年度に実施することとなり、平成28年7月25日、飯田市と株式会社シーテック飯田支店の間で埋蔵文化財包蔵地中羽場遺跡発掘調査業務の業務委託契約を締結した。

以上の経過を経て、現地作業を8月1日に開始し、9月2日に終了した。

整理作業の実施及び発掘調査報告書刊行は、平成29年度で行うこととなり、平成29年4月21日付で、飯田市と株式会社シーテック飯田支店との間で、埋蔵文化財包蔵地中羽場遺跡発掘調査整理及び報告書作成業務の業務委託契約を締結した。整理作業は飯田市考古資料館にて実施した。

## 第2節 調査の経過

### 第1項 現地調査

現地作業はまず重機を用いて表土除去を行った。その後、人力による遺構検出・掘削、遺構実測、写真撮影を行った。遺構実測や遺物採集の調査区は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づき行い、基準メッシュの設置は業者委託により実施した。

### 第2項 整理作業・報告書刊行

遺構等は実測図を基に第二原図の作成、清書を行った。出土遺物は洗浄、注記、復元を順次実施し、遺構毎、調査区毎に整理した。これらのうち、特徴的なものについて実測・清書した。

## 第3節 調査組織

### 第1項 調査（平成28・29年度）

調査主体者 飯田市教育委員会（教育長 代田 昭久）

調査担当者（平成28年度） 羽生 俊郎 佐々木佑里香

（平成29年度） 山下 誠一 羽生 俊郎

調査員 下平 博行 木下 正史

作業員 伊東 裕子 今井 和博 木下由紀子 斯波 幸枝 志水 治裕

関島 修 関島真由美 竹本 常子 中田 恵 中平けい子

福澤 育子 松本 恭子 三木 美保 宮下 典彦 宮内真理子

森藤美知子 森山 律子 吉川 悦子

## 第2項 事務局

飯田市教育委員会

教育次長 三浦 伸一

文化財担当参事 松下 徹 (28)

生涯学習・スポーツ課 課長 赤羽目金利 (27) 北澤 俊規 (28・29)

文化財担当課長 松下 徹 (27) 馬場 保之 (28・29)

文化財保護係 係長 馬場 保之 (27) 下平 博行 (28・29)

文化財保護係 山下 誠一 吉川 豊 (27) 木下 正史

羽生 俊郎 宮澤 圭一 (28) 佐々木佑里香 (28・29)

福井 優希 (29) 村沢ひとみ (27)

\*氏名後の( )内数字は、平成27・28・29年のうちで異動のあった者の在籍年度を記している。

## 第3項 指導・協力

長野県教育委員会事務局

# 第2章 遺跡の環境

## 第1節 自然環境

飯田市は長野県の南部を並走する木曾山脈(中央アルプス)と、赤石山脈(南アルプス)及びその前山である伊那山脈に挟まれた、一般的には伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南端に位置する。谷底には天竜川が諏訪湖から流れて太平洋へ注いでいる。伊那谷南部は三河高原によって閉塞された形で、古来より三河高原が三河・遠江・信濃の国境となってきた。一方で、山地は行政区分を超えた独自の山村文化で地方を繋げており、先の3地方は三遠南信地方として古くから経済的・文化的に深い繋がりがあった。

交通からみると、周辺とは現在、北は国道153号(伊那街道)により上伊那郡、南は天竜川と国道152号(秋葉街道)・国道151号(遠州街道)・国道153号(三州街道)によって静岡県西部・愛知県東部、西は中央高速自動車道西宮線・国道256号(清内路街道)によって木曾谷および岐阜県東部にそれぞれ通じている。飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所である。

伊那谷には、伊那山脈・木曾山脈から天竜川へ流入する河川によって扇状地が形成され、さらに山地と沖積地の間には逆断層が形成された。この逆断層が日本で有数な伊那谷の段丘を発達させた一つの要因である。飯田市周辺では、一般的に比高差約70mの念通寺断層を境に上下を分けて区分し、高燥した台地を上段(うわだん)、湿潤した沖積地を下段(しただん)と俗称している。上段の段丘や扇状地は主に果樹園や宅地として、下段の段丘や沖積地は主に宅地・商業地・水田等として利用されている。これら段丘を天竜川の支流が開析して田切地形を形成しており、伊那谷特有の景観を形成するとともに、行政面や文化面でも境界となっている。

中羽場遺跡は、天竜川右岸の下段、天竜川の現河床から比高差約18mの段丘面上に立地し、遺跡はこの段丘のうち、南北を欠野沢川・並木沢川・西の沢川に挟まれた範囲の一部である。行政区分は座光寺地区であり、北は高森町、東は喬木村、南は飯田市上郷地区と接している。

## 第2節 歴史環境

伊那谷では旧石器時代の遺跡は稀であるが、飯田市山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡出土の旧石器が後期旧石器時代初頭前後とされ、市内のみならず日本列島最古級の人類痕跡として注目されている。

縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在し、その後早期や前期は西側の山麓周辺に遺跡が偏る傾向があるが、中羽場遺跡と同じ段丘面の恒川遺跡群でも当該期の資料が少なからず出土している。中期に入ると爆発的に集落が増加し、上段の段丘面や扇状地に大規模集落が造られ、大門原遺跡や宮崎上遺跡で集落が確認されている。しかし、後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、段丘崖下の湿地付近や河川に面した低位段丘上など、遺跡の立地が変化する。飯田下伊那は、縄文時代を通して東海や関東・中部、東北・北陸、関西の各地方の影響を受けた土器が混在する特徴があるが、相対的に東海地方の影響が強い地域であったといえる。

弥生時代は、中期までは主に下段に恒川遺跡群等安定的な集落が営まれ、後期には上段へも集落が広がり、後期前葉の座光寺原遺跡、後期後葉の座光寺中島遺跡など大規模集落が営まれる。

古墳時代は前期集落が少ないが、古墳時代中期後半から後期にかけて集落が増える。市内の座光寺・

上郷・松尾・竜丘・川路地区を中心に多数の古墳が築造され、馬匹埋葬土坑と馬具の出土が多い特徴がある。5世紀中頃にヤマト政権が海上から陸上へと交通政策を転換したために地理的に飯田の重要度が増し、ヤマト政権と関係の深い馬を管理する集団が飯田にやって来たと推定されている。彼らの首長墓である前方後円墳と帆立貝形古墳が、「飯田古墳群」として史跡に指定されている。当地区では、6世紀前半築造とされ、石室形態等から朝鮮半島との関連が指摘される「高岡第1号古墳」が指定されている。飯田古墳群は最終的に竜丘地区に収斂されていき、座光寺地区には首長墓の空白期間が生じている。

律令制が導入されると当市は東山道信濃国伊那郡に編入された。伊那郡には4ないし5郷があったとされ、座光寺地域は善光寺如来の伝説等から麻績郷であったと推察されている。当遺跡に近接する恒川遺跡群では、7世紀後半から10世紀頃の正倉などが確認されており、「恒川官衙遺跡」として史跡指定を受けている。伊那郡衙は11世紀頃に消滅したとみられ、12世紀末には藤原摂関家の荘園「郡戸荘」となっている。郡戸荘の範囲は天竜川右岸の松川以北で、北限は高森町辺りといわれている。なお、善光寺如来の伝説とは、推古天皇10年(602)、麻績の里の住人本多善光が難波(大阪市)で如来像を見つけて持ち帰り、自宅の白の上に安置したところ白が光輝いたことから坐光寺の名となった。後の皇極天皇元年(642)に現在の善光寺(長野市)へ遷座したことから元善光寺と称するようになったというものである。恒川遺跡群に近接する古瀬平遺跡で瓦が出土しており、古代寺院が存在したことは間違いない。座光寺の地名の由来もこれによるものとされるが、寺伝とは別に、貞観8年(866)、国分寺に次ぐ寺格として伊那郡では「寂光寺」が定められたことが記されており、寂光寺が座光寺の由来とする説も有力である。

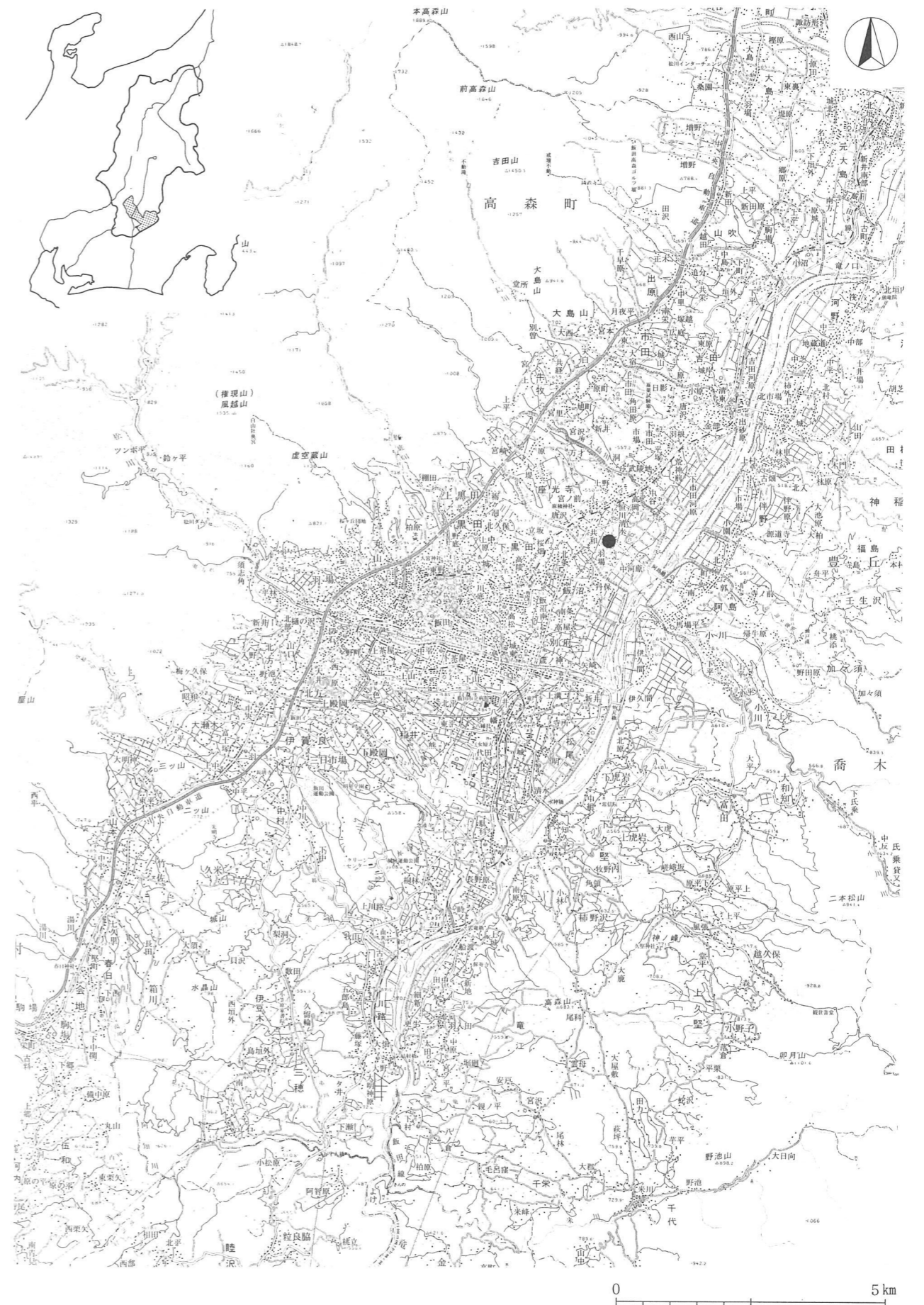
「座光寺」の初見は承久元年(1219)で、諏訪大社上社の社領として「座光寺四十八丁」の記載があるが、『信濃史料』では検討を要す史料として扱っている。続いて応永7年(1400)の大塔合戦に関する軍記に、塩崎城に籠った武将として「座光寺河内守」が登場する。一次史料としては、諏訪大社の祭典に関する長禄4年(1460)の記録に「座光寺入道」が初見であろう。以後しばしば諏訪大社の祭典に奉仕していることから、当地を治めていた座光寺氏は諏訪氏の一族といわれている。中羽場遺跡の北側には、蟹ヶ城・古城・白山などの地名が残り、中世城館があった可能性もある。

天文23年(1554)以降、座光寺氏は武田氏に従ったが、織田軍との抗争により天正3年(1575)美濃岩村城で滅亡した。天正10年(1582)の武田氏滅亡とその後の大乱では、座光寺郷も兵火に見舞われたとみられるが、記録類は少ない。地区内にある長野県史跡「南本城城跡」など、大規模な山城はこの頃の戦乱時に築かれたとみられている。

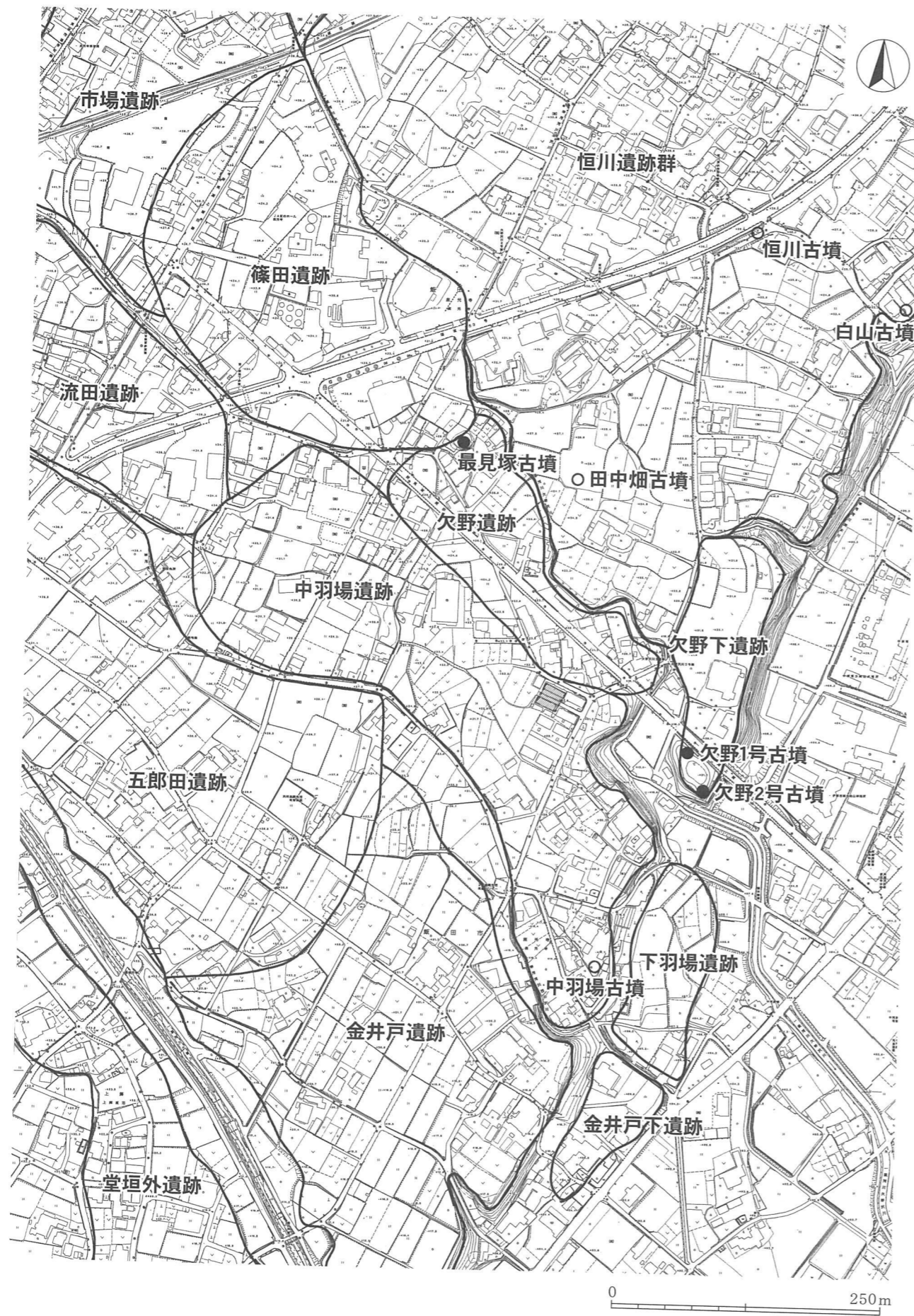
慶長6年(1601)、飯田藩が成立すると、座光寺は幕末まで飯田藩領となった。正徳5年(1715)の梅雨の末期に発生した未満水は、伊那谷有史以来の大洪水といわれており、座光寺地区では恒川遺跡群周辺で数10cmに及ぶ洪水砂の堆積が確認でき、江戸時代の生活面がそのまま埋没している。江戸時代は天竜川沿いの沖積地で新田開発と治水工事がすすめられ、飯田市史跡「座光寺の石川除」は、文政11年から天保2年(1828~1831)にかけて築造された、天竜川と南大島川合流点の石積み製の堤防である。

座光寺村は昭和31年(1956)に飯田市他との合併により廃止され、現在の飯田市座光寺となった。

中羽場遺跡は縄文時代~近世までの遺物が確認されているが、これまで本格的な発掘調査は実施されていない。また、今次調査区周辺では、南側隣接地で試掘調査を実施しているものの、時期不明の溝址が確認されているのみで、全般的に遺跡の時代や種別は不明な点が多い。



挿図1 遺跡位置図

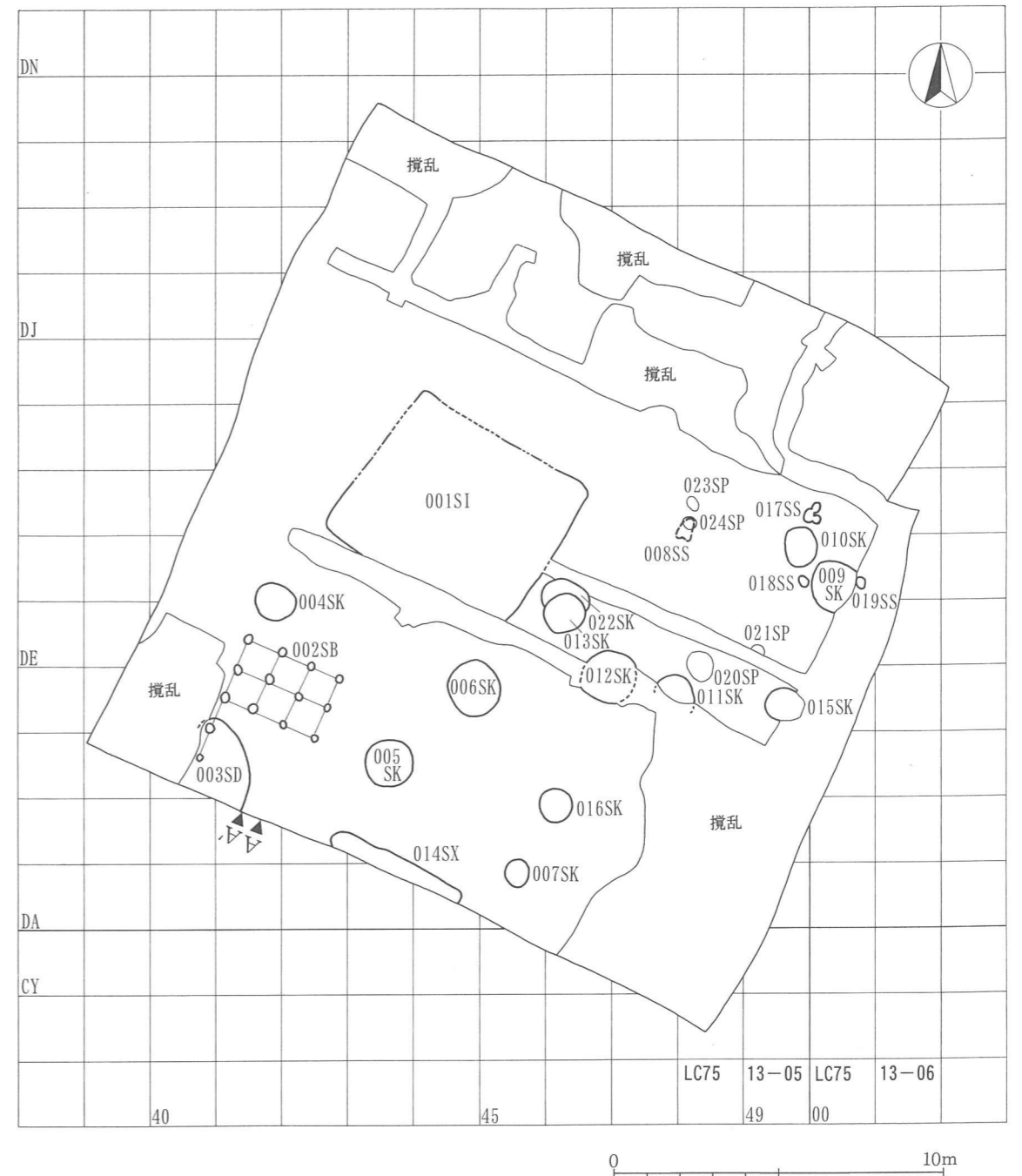


挿図2 調査位置図及び周辺遺跡図

### 第3章 調査結果

#### 第1節 調査区の設定

調査地は、基準メッシュ VIII-LC 75 13-05及び同06に位置する。中区画は2区画に跨るものの、最少単位のグリット番号は同じものがないため、現地作業及び報告にあたってはグリット番号のみを用いた。



挿図3 遺構全体図

## 第2節 調査の概要 (挿図3)

調査前は更地であったが、以前には寄宿舍があった場所であり、調査区の北東側半分と東側でその際の攪乱を受けており、攪乱の著しい場所は調査対象外とした。調査区のほぼ中央に弥生時代の竪穴建物1棟があり、南側に縄文時代の土坑群が並ぶ状況であった。

遺構の概要は以下のとおりで、当該遺構の番号の等を( )内を記している。

縄文時代の遺構 土坑：11基 (004・005・006・007・009・010・011・012・013・015・022)

配石：4基 (008・017・018・019)

小穴：4基 (020・021・023・024)

弥生時代の遺構 竪穴建物：1棟 (001)

近世以降の遺構 掘立柱建物：1棟 (002)

時期不明の遺構 溝：1条 (003)

不明遺構：1基 (014)

## 第3節 土層 (挿図4)

地山であるⅢ層上面を遺構検出面として調査を行ったが、場所によって土色や質が異なる。調査区中央付近が最も浅い堆積で、南北に行くに従い検出面が深くなっており、南西隅では川砂に近い地山となっている。また基本層序には表れていないが、場所によってはⅡ層とⅢ層の漸移層が15cm程度ある。

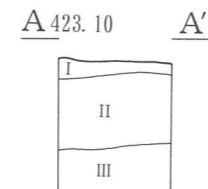
Ⅰ層：碎石・造成土

Ⅱ層：5Y6/2 (灰オリーブ) S ~

10YR4/3 (にぶい黄褐) SL 表土

Ⅲ層：5Y7/3 (浅黄) S ~

10YR6/2 (灰黄褐) SL 地山



挿図4 基本層序

## 第4節 遺構

### 第1項 縄文時代の遺構

#### (1) 土坑 (SK)

##### ① 004SK (挿図5・9、写真図版2)

DE41を中心に位置し、平面は123×112cmの楕円形を呈し、深さ37cmを測る。一部柱穴状の攪乱を受けている。遺物は縄文土器の深鉢片(挿図9-1~5)が出土しており、縄文時代早期の遺構と判断した。

##### ② 005SK (挿図5・9、写真図版2)

DC43に位置し、平面は直径146cmの円形、深さは60cmを測る。埋土は不規則な堆積である。遺物は縄文土器深鉢片(挿図9-6~8)と、石皿片(挿図12-1)・石鏃(図12-9・10)が出土しており、遺物から縄文時代早期の遺構と判断した。

##### ③ 006SK (挿図5・9、写真図版2)

DD44を中心に位置し、平面は直径162cmの円形、深さは68cmを測る。遺構の中央の検出面付近に、焼土層(1層)と炭化物を多く含む層(2層)の堆積が認められた。他の土層はレンズ堆積に近いものの、不規則な堆積であり、性格等は不明である。遺物は縄文土器深鉢片(図9-9・10)が出土しており、縄文時代早期の遺構と判断した。

##### ④ 007SK (挿図5・9・11、写真図版2)

DA45に位置し、平面は83×72cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。途中がくびれて底部が広がる袋状の断面形であり、下端は92×88cmを測る。底部は平坦で、礫が3個出土した。形状からして、貯蔵穴の可能性がある。遺物は縄文土器深鉢片(図9-11)と横刃形石器(図11-5・6)があり、出土遺物から縄文時代早期の遺構と判断した。

##### ⑤ 009SK (挿図5・9、写真図版2)

DF00を中心に位置し、東側は攪乱を受けている。一辺(137)×148cmの楕円形を呈すとみられ、検出面からの深さは45cmを測る。遺構中央、埋土上層に焼土と炭化物を多く含む層(1・2層)が存在し、以下はレンズ堆積に近い。遺物は縄文土器深鉢片(図9-13~15)が出土しており、縄文時代中期の遺構と考えられる。

##### ⑥ 010SK (挿図5・写真図版3)

DF49を中心に位置し、平面は118×96cmの楕円形に近く、深さは23cmを測る。遺物は石鏃(図12-11・12)が出土しており、縄文時代のおそらくは早期と考えられる。

##### ⑦ 011SK (挿図5図・写真図版3)

DD47を中心に位置し、大半は攪乱を受けており平面形は不明である。遺構検出面からの深さは83cmを測る。遺物は図化できたものはないが、周辺の土坑との関連から縄文時代早期あるいは中期の遺構と考えられる。

##### ⑧ 012SK (挿図6、写真図版3)

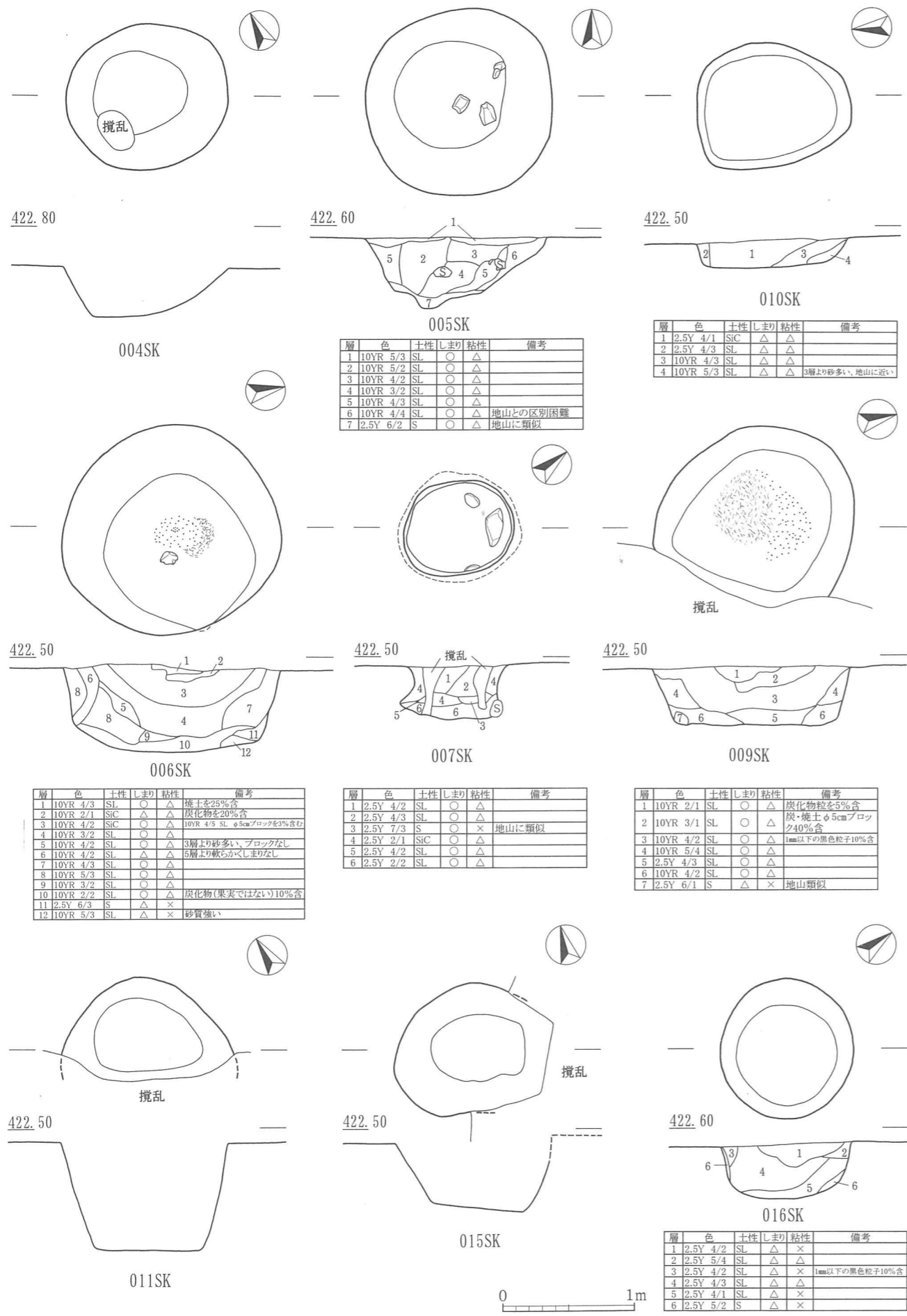
DD46を中心に位置する。中央部を攪乱が横断しているが、直径160cmの円形に近い平面形とみられる。遺構検出面からの深さ75cmを測る。埋土はレンズ堆積をしている。遺物は図化できたものはないが、周辺の土坑との関連から、縄文時代早期あるいは中期の遺構と考えられる。

##### ⑨ 013SK (挿図6・9・11・12、写真図版3)

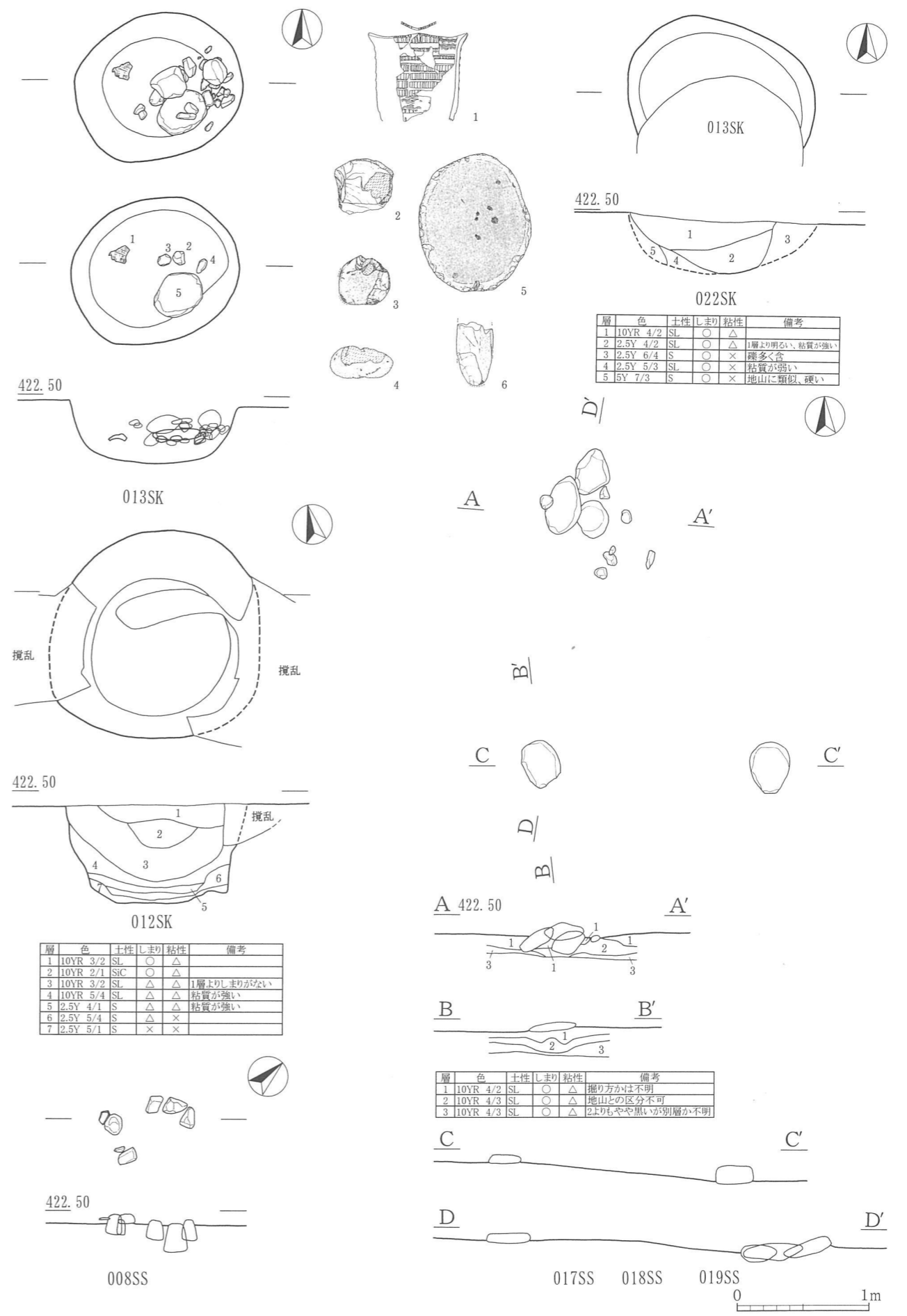
DE46に位置し、022SKと重複する。調査途中で重複が確認できたため遺構を区分し、本土坑を先に調査した。重複関係は不明であり、図とは逆転するが022SKの方が新しい可能性もある。平面は127×110cmの楕円形とみられ、深さは41cmを測る。底部から少し浮いた位置に礫が多数出土し、石皿や礫器、土器片が混じっていた。礫の多くは南東側に集中するが、北西側は022SKによって失われている可能性もある。遺物は縄文土器深鉢片(図9-18~27)、横刃形石器・礫器・敲石・石皿(図11-7~11)・石鏃(図12-13)が埋土中から出土した。出土遺物から縄文時代早期の遺構である。

##### ⑩ 015SK (挿図5・9)

DD49に位置し、一部攪乱を受けている。113×100cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。遺物は縄文土器深鉢片等(図9-16・17)が出土している。縄文時代早期の遺構と考えられる。



挿図5 004SK~007SK、009SK~011SK、015SK・016SK



挿図6 012SK・013SK・022SK、008SS・017SS~019SS



⑪ 016SK (挿図5)

DB46を中心に位置し、平面は105×100cmのほぼ円形である。深さは42cmを測る。遺物は図化できなかったものがないが、周辺の遺構との関係から縄文時代早期の遺構と考えられる。

⑫ 022SK (挿図6、写真図版3)

DE46に位置し、013SKと重複する。調査途中で重複が確認され、013SKとの区分が必ずしも明確にはできなかったが、本来は本土坑の方が013SKよりも新しい可能性が高い。平面は楕円形を呈するものとみられ、上端の計測値は148cm、検出面からの深さは48cmを測る。遺物は図化できたものはないが、周辺以降の関連から縄文時代早期または中期の遺構と考えられる。

(2) 配石・礎石 (SS)

① 008SS (挿図6・10)

DG48を中心に位置する礫群で、70×60cmの範囲に6つの礫が分布していた。礫のうち一つは敲石(図12-2)である。掘り方等確認できなかった。遺構の性格は不明である。付近のⅡ層からⅢ層の漸移層にかけて、縄文土器深鉢片(図10-18・19)が出土していることから、縄文時代早期の遺構と考えられる。

② 017SS・018SS・019SS (挿図6・10、写真図版3)

017はDG00を中心に分布する礫群、018はDF49に位置する扁平礫、019はDF00に位置する扁平礫である。それぞれ石又は集石の芯と芯の間で、017と018は200cm、018と019は180cmを測る。調査上3つの遺構に分けていたが、3者で一つの遺構の可能性もある。土層観察からは、自然堆積との区分はできなかった。礎石建物址の礎石、埋甕の蓋の可能性を含めて調査をしたが、いずれでもなかった。周辺からは、縄文時代早期の深鉢片(図10-19~21)の他、縄文時代中期後葉の深鉢片が出土している。縄文時代早期の遺構の可能性が高い。

(3) 小穴 (SP、挿図8)

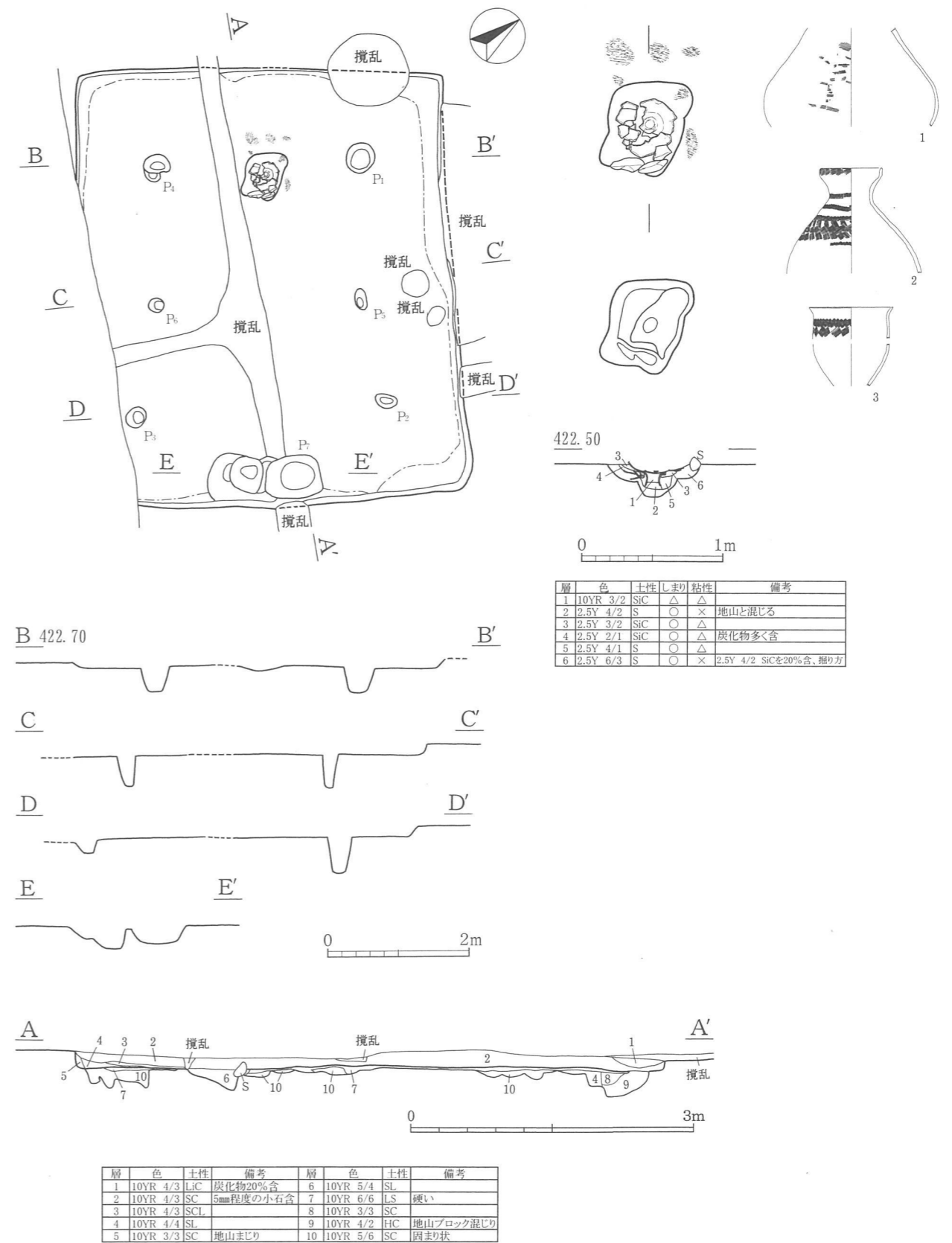
DG48を中心に位置し、直径深さ14~24cmの小穴(020SP・021SP・023SP・024SP)が4基確認され、性格は不明であるが、出土遺物や周辺の遺構の関係から、縄文時代早期に属する穴と考えられる。

第2項 弥生時代の遺構

(1) 竪穴建物 (SI)

① 001SI (挿図7・9・10・12、写真図版4・5)

DG44を中心に検出した。南側と中央を現代の配管によって攪乱されている。主軸方向で625cm、短軸は奥壁側で522cmを測り、主軸はN59°Wを示す。平面形は隅丸長方形で、壁高は11~21cmを測る。床はほぼ全面に貼床が堅固に貼られており、周溝は確認できなかった。柱は、P1~4までの支柱穴4基と、主軸方向の間のやや内側に支柱とみられるP5・6がある6穴である。



挿図7 001SI

南東壁中央部の壁下に入口施設とみられる横長の掘り込みがあり、中央が土橋状に浅くなっている。主軸方向に右の穴が25cm、左の穴が36cmを測り、断面観察では一部埋め戻されて貼床が覆っている形となっている。

炉址は小さな炉縁石を伴う土器埋設炉である。壺2、甕1の3個体を炉体に用いており、土器と土器の間に灰や炭化物が多く認められたことから、おそらくは2回の作り替えをしているものとみられる。すなわち、穴を掘った後、3の甕を炉体に用いた時期（下層）、3の一部を取り外し、2の壺の口縁を逆位に埋設した時期（中層）、その後2の上に1の個体を配置した時期（上層）があったとみられる。

竪穴建物の埋土はレンズ状堆積となり、自然に埋まったものと考えられる。断面観察では、点線で示した内側の貼床下に掘り方が大規模に確認されている。なお、写真図版の掘り方は挿図7の場所とは異なることを付記しておく。

遺物は、炉体土器（9-33・34、10-1・2）と弥生土器片（10-3・4、13~15）、縄文時代の深鉢片（挿図10-5~12）と石器（12-14~16、21・22）が出土している。なお、弥生土器片（10-13~15）は、本址より先行する弥生時代中期に位置づく。

出土遺物から、弥生時代後期初頭に位置づけられる。

### 第3項 時期不明の遺構

#### (1) 掘立柱建物（SB）

##### ① 002SB（挿図8、写真図版5）

DD41を中心に位置し、西側を攪乱、南側の一部で003SDを切る。一部柱穴が確認できなかったが、東西方向3間、南北方向4間の建物とみられる。長軸方向はN27°Eを示し、桁行とみられる。桁行は392cm、梁間は304cm、平均の柱間寸法は桁行で98cm、梁間で101cmと1mに近い。柱穴の深さは最深で52cmだが、10cmに満たない場所もあり、一定のレベルではない。柱穴2基、図中網部でアタリが確認された。時期決定は困難であるが、埋土の状況や現在の土地利用と軸方向が一致していることから、近世以降の遺構とみられ、性格は不明である。

#### (2) 溝（SD）

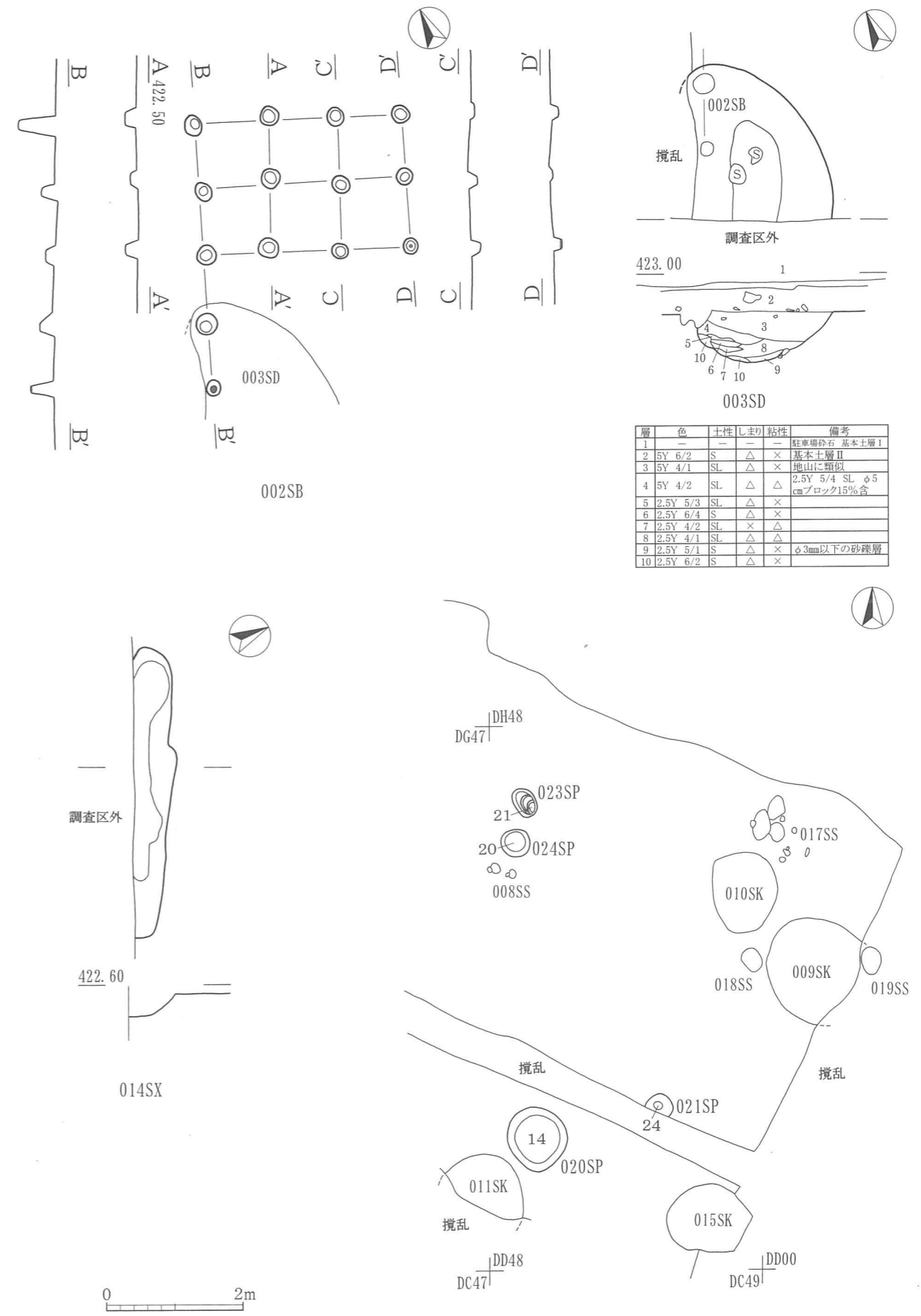
##### ① 003SD（図8、写真図版5）

DC40を中心に位置し、西側は攪乱、南側は調査区外となっている。調査範囲ではやや湾曲した平面形で、上幅215cm、深さ156cmを測り、断面は浅いU字形であるが、形状は整っていない。底部には砂質の強い埋土が堆積しており、若干湛水していた期間があったかもしれない。時期・性格共に不明である。

#### (3) 不明遺構（SX）

##### ① 014SX（挿図8）

DA43を中心に位置し、南側大半が調査区外である。一辺425cm、検出面からの深さは33cmである。底面は平らでない。埋土に締りはなく、近世以降の遺構とみられ、性格は不明である。



挿図8 002SB、003SD、014SX、020SP・021SP・023SP・024SP

## 第5節 遺物 (挿図9~12・写真図版6~8)

今次調査では縄文時代と弥生時代の遺物が出土した。出土量も少なく断片的な資料ではあるが、時期ごとに簡単に記述する。

### 第1項 縄文時代の遺物

縄文時代では土器と石器があり、土器は拓影で示した深鉢片がほとんどで、図化した個体は1点にすぎない。石器は打製石鎌が多く、そのほかは少量出土した。土器と石器に分けて記述する。

#### (1) 土器

縄文時代早期と中期の深鉢が出土した。

##### ① 縄文時代早期

縄文時代早期後葉の押型文土器があり、押型文土器最終末の相木式土器と把握される。013SKには図化できた深鉢があり(9-18)、同一個体の胴部片(9-19~23)もある。丸底気味の尖底部(挿図9-25)も同一個体の可能性がある。口縁部に刺突文、胴上部に刺突文が施された隆帯が2条施され、その下は隆帯と押引文が4条巡らされる。胴下部は山形文と押引文となる。口縁部内面には横位の山形文が施文される。押型文土器は他に、005SK(9-6~8)・009SK(9-13)・015SK(9-16)、弥生時代後期の竪穴建物001SIの覆土中から出土したもの(10-5~7・9)、グリットから出土したもの(10-17~19)、表土中から出土したもの(10-22)があり、いずれも相木式土器と考えられる。

縄文時代早期後葉の沈線文土器がわずかに出土し(10-8、10-16)、田戸下層式土器と把握される。

縄文時代早期末葉に位置づく隆帯文系土器が004SK(9-1~4)、007SK(9-11)から出土した。早期末葉では、東海系条痕文土器が006SK(9-9・10)・表土(10-23)から出土し、入海式土器と把握される。また、表土出土の10-26は形式名不明ではあるが、東海系条痕文土器と考えられる。

##### ② 縄文時代中期

縄文時代中期では中葉と後葉の深鉢片がわずかに出土した。中期中葉では、009SK(9-15)・013SK(9-27)・020SP(9-30)・表土(10-27)出土のものがあり、9-27の平出皿A式土器以外は藤内式土器に比定される。中期後葉は、020SP(9-28・29・31・32)・表土(10-24)から出土したものがある。

#### (2) 石器

土器と同様に縄文時代早期と中期に分けることができる。縄文時代早期に位置づくのは以下のものである。

##### ① 縄文時代早期

横長剥片の長片を刃部とする横刃型石器が、005SK(11-5・6)・013SK(11-7)から出土した。いずれも石材は硬砂岩である。自然礫の側縁に磨面をもつ特殊磨石が013SK(11-10)から出土した。端部には敲打痕が認められ、敲打器としても使われた可能性がある。弥生時代後期の竪穴建物001SIから出土した2点(11-3・4)も同様に特殊磨石と把握される。円礫の上面に

磨面をもつ磨石がSK13(11-8)から出土した。人為的な剥離痕と敲打痕が認められる。自然礫に粗雑な剥離調整を施した礫器が013SK(11-9)から出土した。敲打器が008SS(11-2)から出土した。端面に顕著な敲打痕が認められ、わずかに磨面も観察される。石皿は005SK(11-1)・005SK(10-1)から出土した。後者は破損しており、一部が残っているにすぎない。打製石鎌は005SK(12-9・10)・010SK(12-11・12)・013SK(12-13)から出土した。他に、弥生時代後期の竪穴建物001SI(12-14~16)、遺構外(12-18~20)から出土した。打製石匙が013SK(12-21・22)から出土した。その他、遺構外(12-23)から出土したピエス・エスキュー(12-23)も該期と把握される。なお、遺構外から出土した敲石(12-3)も該期に位置づく可能性が高い。

##### ② 縄文時代中期

縄文時代中期に位置づくのは、014SX(12-7)・遺構外(12-4~6)から出土した打製石斧、014SXから出土した横刃型石器(12-8)と考えられる。

## 第2項 弥生時代の遺物

弥生時代後期と弥生時代前期~中期に位置づくものがある。

#### (1) 土器

##### ① 弥生時代後期

弥生時代後期では、竪穴建物001SIから出土した5点が図化でき、壺(9-33、10-1~3)と甕(9-34)がある。壺(9-33)は口縁部が受け口状となり、口縁部に櫛描の斜走短線文、頸部から胴上部に波状文3段、方向を変えた斜走短線文3段、さらに波状文が施文される。壺(10-1)は胴部が残り、下膨れ気味の器形となる。甕(9-34)は口縁部が緩く外反し、口縁端部に刻み、胴上部に櫛描の波状文と斜走短線文が施文される。壺の器形や文様構成に中期的な様相を残すが、甕の器形や文様は後期に通有のものである。こうした様相から弥生時代後期初頭に位置づくと考えられる。

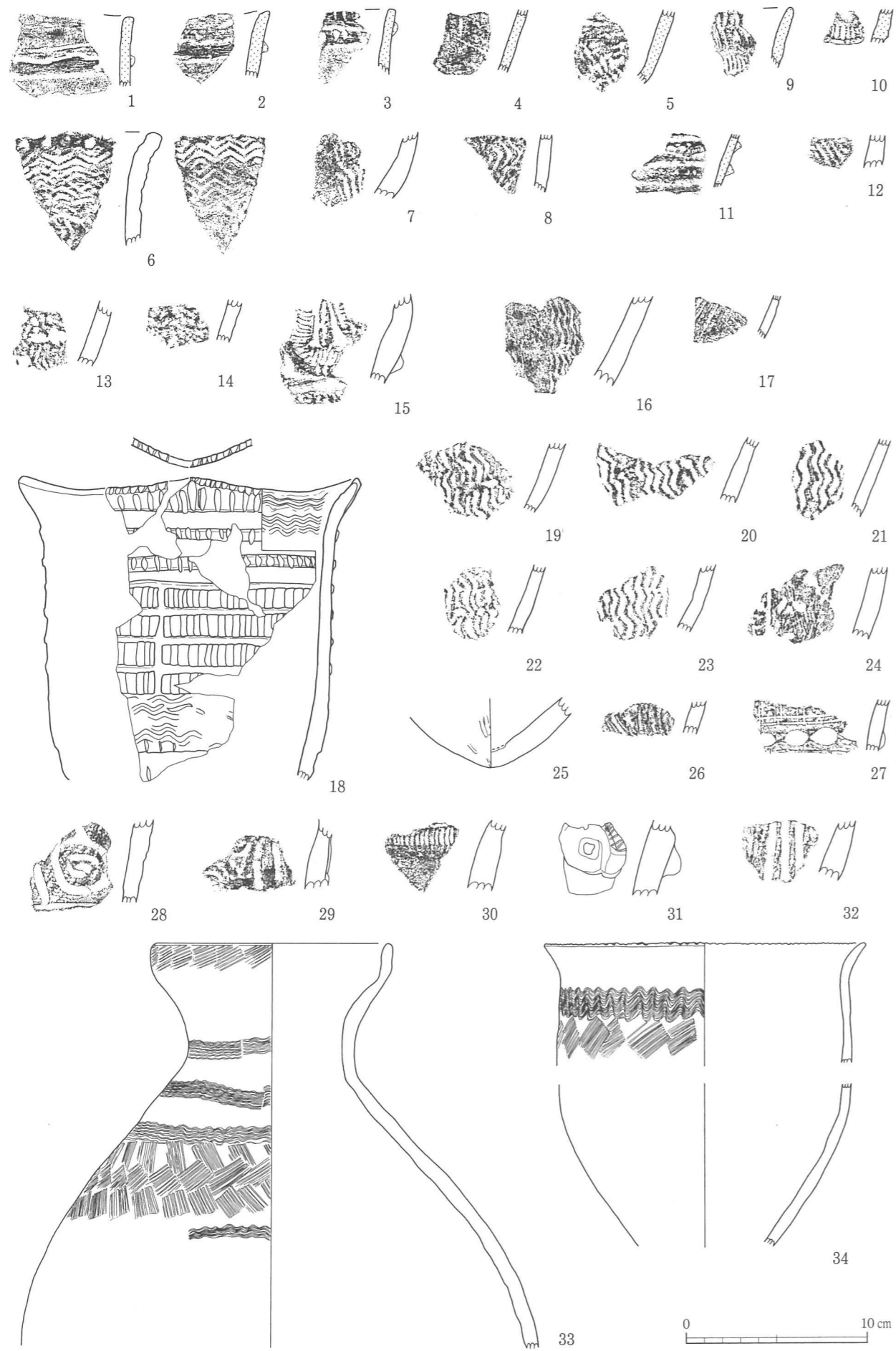
##### ② 弥生時代前期~中期

弥生時代前期~中期では、前期初頭と中期中葉のものがある。前者は001SIの壺(10-12・13)があり、東海の檜王式に並行すると考えられる。後者では001SIの甕(10-14・15)、015SK(9-17)、グリット出土の壺(10-20・21)、表土から出土した壺(10-28~32)がある。いずれも小破片で詳細な位置づけは不可能であるが、中期中葉の寺所式・阿島式土器と考えられる。

#### (2) 石器

##### ① 弥生時代後期

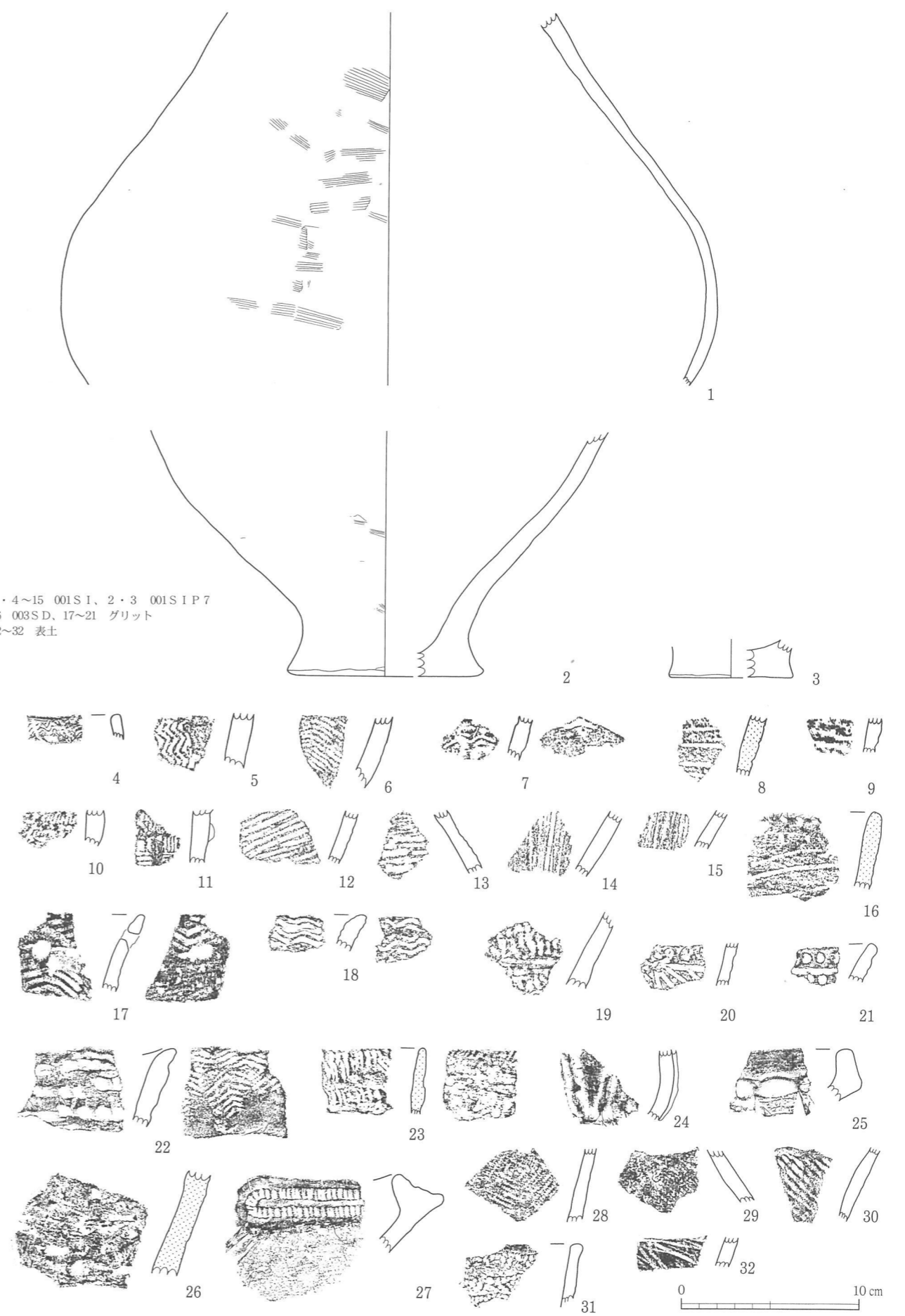
弥生時代後期初頭の001SIから有肩扇状形石器2点(11-1・2)が出土した。両者とも刃部に使用痕であるロウ状光沢が認められる。有肩扇状形石器は当地方の弥生時代中期以降に普遍的にみられる収穫具で、イネの二度刈り用等に使われたものである。



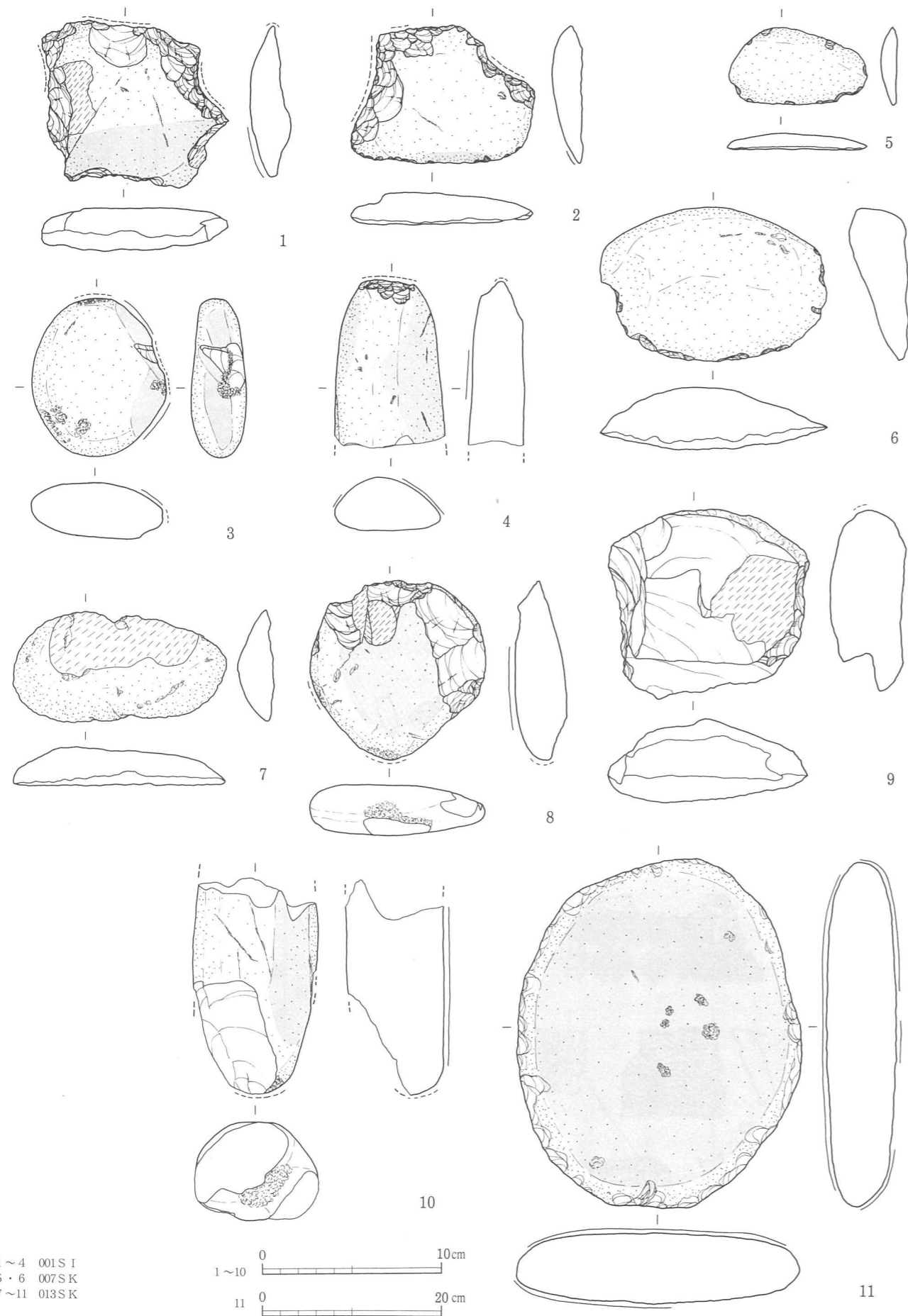
1~5 004SK, 6~8 005SK, 9・10 006SK, 11 007SK, 12 017SS  
 13~15 009SK, 16・17 015SK, 18~27 013SK, 28~32 020SP, 33・34 001SI 炉

挿図9 SK・SS・SI出土土器

1・4~15 001SI, 2・3 001SIP7  
 16 003SD, 17~21 グリット  
 22~32 表土

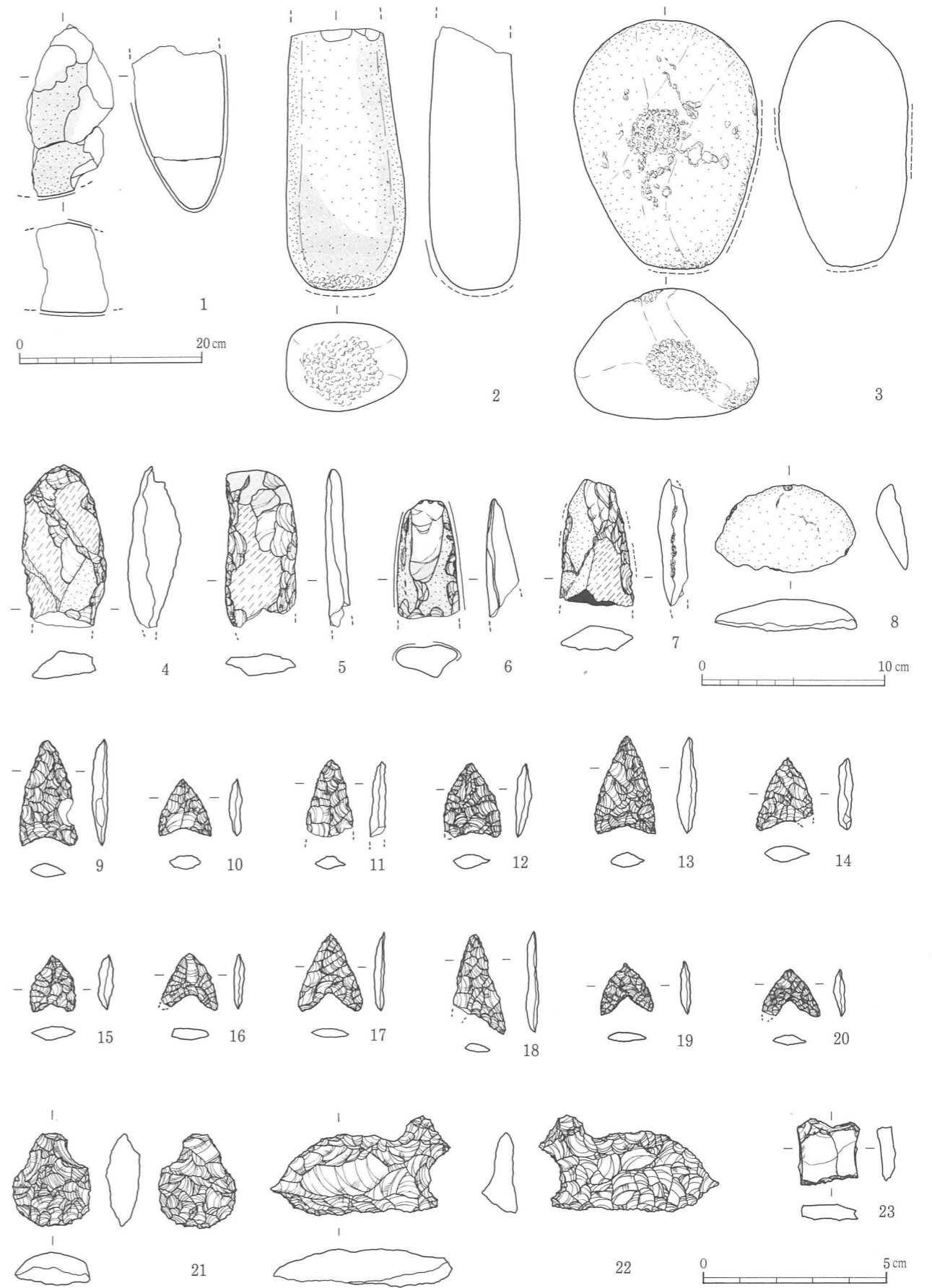


挿図10 SI・グリット・表土出土土器



1~4 001S I  
5・6 007SK  
7~11 013SK

挿図11 S I・SK出土石器



1 005SK, 2 008SS, 3 遺構外, 4~6 003SD  
7・8 014SX, 9・10 005SK 11・12 010SK, 13 013SK  
14~16・21・22 001S I, 17 003SD, 18~20・23 遺構外

挿図12 SK・S I・グリット・遺構外出土石器

## 第4章 ま と め

中羽場遺跡は座光寺地区の下段（低位段丘Ⅱa3）に立地する。同一段丘面の北には欠野遺跡、西に流田遺跡、南に五郎田遺跡・金井戸遺跡が隣接し、史跡恒川官衙遺跡を含む恒川遺跡群も北側に近接する。南には座光寺地区と上郷地区を分ける土曾川が流れ、東側は段丘面となって下羽場遺跡が隣接するが、その先には天竜川の氾濫原が広がる。天竜川やその支流の氾濫による災害は受けにくく、原始・古代から良好な生活舞台であったといえる。現在は水田等の農地の中に住宅などが点在している。中羽場遺跡では試掘調査が実施されているが、発掘調査は実施されておらず、その実態は不明とってよかつた。

今回の調査結果は先に述べてきたとおりであるが、縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が調査された。調査範囲は限られていたが、今まで不明であった中羽場遺跡の様相が明らかとなった。そこで、今回の調査成果と課題について、時期ごとに若干の考察を行ってまとめとする。

縄文時代では早期後葉～終末の遺構と遺物が出土した。最も良好な資料は013SKで、押型文土器最終末に位置づけられる相木式土器や特殊磨石・磨石・礫器・石皿が出土した。沈線文系土器・隆帯文系土器・東海系条痕文土器が、004SK・005SK・007SK・009SK・015SKから出土しており、弥生時代後期の竪穴建物001SIや時期不明の003SDからもこうした土器が出土した。遺物が出土しなかった土坑の大半も、遺構の状況から該期に位置づく把握した。縄文時代早期後葉～終末までの比較的長期間にはわたるが、調査区周辺も含めて該期の一定の生活空間があったと把握される。

当地方の縄文時代早期後葉～終末の状況をみると、断片的な資料しか得られていない。そうした中、座光寺地区の恒川遺跡群・美女遺跡・半の木遺跡や上郷地区の大明神原遺跡から該期の資料が得られている。恒川遺跡群では、相木式土器・沈線文系土器・東海系条痕文土器・塩屋式土器等とそれに伴う石器も出土した。遺構は1m前後が多くて最大で1.9mを測る規模の小竪穴7基と、ユニットとされた遺物集中箇所が6箇所調査された。小竪穴はいずれも塩屋式土器が主体で、早期終末に位置づく（飯田市教委1986）。美女遺跡では、早期後葉の条痕文系土器の茅山下層式土器・粕畑式土器等が断片的に出土し、早期終末の塩屋式土器が比較的まとまって出土した。この時期では、遺構は竪穴建物1棟・集石・貯蔵穴・土坑が調査され、竪穴建物と土坑等から構成される集落の様相を知ることができる（飯田市教委1998）。また、美女遺跡に隣接する半の木遺跡からは、早期後葉の東海系条痕文土器が出土した。遺構は茅山下層式土器を埋納した土坑や土坑・集石等が調査され、竪穴建物は検出されていない（飯田市教委2000）。黒田大明神遺跡では、早期後葉の沈線文系土器・条痕文系土器が出土し、竪穴建物1棟と土坑が調査された（飯田市教委1997）。

早期後葉～終末の様相を簡単にみてきた。竪穴建物が調査されたのは黒田大明神原遺跡と美女遺跡でそれぞれ1棟のみで、そのほかは土坑・集石等遺構が検出されている。美女遺跡では、竪穴建物と土坑が散在的に分布し、集落規模は小さいことが推測されている。中羽場遺跡でも同様な状況で、集落域の一部を調査したと考えられる。集落立地をみると、中羽場遺跡と恒川遺跡群は天竜川の氾濫原に近い下段に立地し、遺跡立地の広がりにも注意する必要がある。

縄文時代中期は、中期中葉～後葉の土器・石器が少し出土した。遺構に伴うものはないが、周辺地域には該期の集落が残されている可能性は高い。

弥生時代では、後期初頭の竪穴建物が1棟調査された。その他の遺構は検出されておらず、集落の様相については明確ではないが、小規模な集落である可能性が高い。集落立地をみると、中期後半では下段に限定され、後期初頭から上段に進出すると考えられている（山下2000）。下段には後期の集落は中期から引き続き営まれており、中羽場遺跡も同様に位置づけられる。今次調査では中期後葉の遺物は出土していないが、周辺地域には該期の集落が展開すると考えられる。

弥生時代中期中葉の寺所式・阿島式土器が遺構外から少量出土した。周辺地域には該期の生活域が残されている可能性は高い。

まとめとして、縄文時代と弥生時代の様相を概観してみた。今次調査の調査成果について十分にまとめられたものではないが、比較的少ない縄文時代早期後葉～終末、弥生時代後期初頭の様相が明らかになったことは大きな成果といえる。今後とも、地道な文化財の保護活動を実施することにより、地域の歴史を明らかにしていく必要がある。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解をいただき、調査の実施に当たって多大なるご高配・ご協力をいただきました株式会社シーテック飯田支店に対して、記して感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 飯田市教育委員会 1997 『黒田大明神原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999 『座光寺中島遺跡』
- 飯田市教育委員会 2000 『半の木遺跡』
- 飯田市教育委員会 2013 『恒川遺跡群 総括編』
- 飯田市教育委員会 2015 『飯田市市跡 座光寺の石川除 確認調査報告書』
- 大川清・鈴木公雄・工楽善通（編） 1996 『日本土器事典』 有山閣
- 小林達雄（編） 2008 『総覧 縄文土器』 株式会社アム・プロモーション
- 下伊那地質誌編集委員会（編） 1976 『下伊那の地質解説』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財  
発掘調査報告書』
- 山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向—発掘調査された竪穴住居址を基にして—」  
『飯田市美術博物館研究紀要』 第10号



調査区全景



調査区全景



004 S K



007 S K



005 S K



005 S K



006 S K 遺物



006 S K



009 S K 検出 (焼土等)



009 S K





010 S K



011 S K



012 S K



013 S K ・ 022 S K



013 S K 遺物 ・ 022 S K



013 S K 遺物出土状況



017 ・ 018 ・ 019 S S



017 S S



001 S I



炉 上層



炉 中層



炉 半裁



炉 下層



001 S I 入口施設



001 S I 掘方断面



002 S B



003 S D



作業風景



作業風景



作業風景



調査地の現状



004 S K 出土土器



013 S K 出土土器



013 S K 出土土器



005 S K 出土土器



001 S I 出土土器



007 S K 出土石器



013 S K 出土石器



遺構・遺構外出土打製石鏃



001 S I 出土打製石匙

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	なかはばいせき					
書名	中羽場遺跡					
副書名						
編著者名	羽生 俊郎・山下 誠一					
編集機関	飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 飯田市大久保町2534番地					
発行年月日	平成30年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 遺跡番号	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 調査原因
なかはば 中羽場遺跡	いだしぎこうじ 飯田市座光寺 4473-1	20205 115	35° 31' 38"	137° 51' 41"	2016/08/01 ～ 2016/09/02	437㎡ 寄宿舍建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中羽場遺跡	集落址	縄文・弥生	縄文時代 土坑  弥生時代 竪穴建物	縄文時代 土器・石器  弥生時代 土器・石器	縄文時代早期の土坑、 弥生時代後期初頭の竪 穴建物。	
要約	<p>今次調査区では、市内でも類例の少ない縄文時代早期後葉～終末の資料が比較的多く出土した。集落の様相については明確にはできないが、小規模集落の一部を調査したと把握した。天竜川に近い同一段丘面の恒川遺跡群でも同時期の資料が出土しており、該期集落の広がりを注意する必要がある。</p> <p>弥生時代後期初頭の竪穴建物が調査され、小規模集落の一部と把握した。</p>					